

KIF NEWS

2008.3

No. 6

かながわ国際交流財団
Kanagawa International Foundation

ケイアイエフ ニュース



特集

私が始める「ボランティア」 ～踏み出そうはじめての一步 …………… 2

あーす ぷらご NGO情報アーカイブコーナー	5
知をめぐる対話シリーズ(5) 建畠哲さん(国立国際美術館長)	6
かながわのキーパーソン 横川芳江さん(NPO法人横浜NGO連絡会事務局長)	9
[KIF Report] 湘南国際村フォーラム、あーす ぷらご 10周年記念イベント 他	10
[Event Schedule] 多文化子ども支援フォーラム、あーすフェスタかながわ2008 他	11



特集

私が始める「ボランティア」

～踏み出そうはじめての一步

最近ではシニア世代の第2の人生として、また高校生の学習過程の一環としてなど、「ボランティア」活動に対する関心が一層高くなっています。しかし、関心のある人はいても、実際にやっているという人は意外に多くはありません。『平成16年版国民生活白書』によると、「NPOやボランティア、地域の活動など」に「現在参加している」と回答した人は10%程度ですが、「今後は参加したい」と回答した人は50%程度です。きっかけがない、時間がないといった理由から、「関心はあるけどやったことはない」という人が多いようです。

そのような意識の一方で、「ボランティアは余裕のある人がすること」と捉えられることも少なくありません。そこには「ボランティア」という言葉が持つ「施し」のイメージが強く反映されています。実際にはそのような側面もあるかもしれませんが、「ボランティア」活動をしている人たちの声を聞いていると、決してそれだけではない、人それぞれにとっての意義や思いがあるように感じられます。

今回は、そんな「ボランティア」活動をしている人たちに、そのきっかけと思いを聞きました。今回の特集が「これからボランティアを始めたい」と思う人たちの自分にとっての「ボランティア」を見つける足がかりになれば幸いです。

自分自身が変わらなければ

清水千絵さん

(市民国際プラザ、NPO法人国際協力NGOセンター職員)

「国際機関で働くためのキャリア」という位置づけで、開発教育協会というNPO法人のイベント運営を手伝ったのが、私の最初の「ボランティア」に当たると思います。そこで参加者名簿や会場への案内表示の作成、チラシや会報の発送作業、当日運営をし、「NGOでは自分たちでこんな作業もやらないといけないのか」と感じました。

そんな私の人生を変えたのは南アフリカへの卒業旅行でした。それまで私は日本がアフリカを援助してあげなければと考え、日本にいる自分はアフリカよりも上の立場にいたのだと思います。しかし、「何かをしてあげよう」と行った自分が、現地の人に気を遣われ、訪問したところの人に便宜を図ってもらい、「ボランティア」しているのは実は現地の人々の方ではないかと感じました。その経験から、誰かに施しをするのではなく、自分自身が変わらなければいけないと考えるようになりました。卒業後、自分で何かできることはないかと思い、最初に手伝った団体でインターンをさせてもらいました。会議の記録や講師派遣のアシスタント、資料整理などをし、現在も会員として事業の運営に関わっています。「ボランティア」は、もっとイキイキと暮らせる社会を創るための、小さいけれど確かな一歩だと思っています。



しみず・ちえさん

NPO法人開発教育協会(DEAR)でボランティア、インターンを経験。現在はNPO法人国際協力NGOセンター(JANIC)に在職中。霞ヶ関にある市民国際プラザの担当をしている。かながわ開発教育センター(K-DEC)運営委員や「未来は僕らの手の中プロジェクト-選挙に行こうぜ!」などさまざまな活動に関わっている。

(財)自治体国際化協会 市民国際プラザ

自治体とNGOの国際協力に関する情報収集・提供や連携を促進するための活動を行っている。時期によって企画展示を行っている。国際協力に関する書籍、イベントなどの情報、自治体やNGOの団体資料などの蓄積が豊富。

詳しい情報：<http://www.plaza-clair.jp/>

E-mail：international_cooperation@plaza-clair.jp

TEL：03-3519-7581 FAX：03-3519-7597

地球市民の一員であることを自覚

長谷川真さん

(あーすフェスタかながわ企画委員)

1986年「過去に学び、未来を創る」をテーマにしたピースボート*に参加し、パラオの青い珊瑚礁の海に沈む旧日本軍の戦闘機、フィリピンのネグロス島（かつて飢餓の島と呼ばれていた）で働くサトウキビ農園の労働者とその家族、日本統治時代に台湾で起こった最大の抗日武装蜂起「霧社事件」の町などを訪問しました。そのとき、現地の人たちとの交流を通じて、地球市民の一員であることを自覚しました。1987年、インド、スリランカ、ネパール、タイを放浪。現地の健康や経済的に恵まれない人たちが、たくましく生きる姿を見て、自分も何か役に立ちたいと思い、国際協力のボランティアに進むようになりました。

2000年にラテンアメリカ人家庭の中高生を対象に青少年の育成と母語、母文化の理解促進を目的として、ラテンアメリカ出身の母親たちとラテンアメリカ青少年の会を設立しました。現在は、その他に横浜市市民活動支援センター運営委員や、やまと国際交流フェスティバル副実行委員長などを務めています。

*アジアをはじめ地球の各地を訪れる国際交流の船旅



ペルーの歌手、マリア・ヘスス・ロドリゲスさん(通称 ラ・ミシュキ)と長谷川さん(左)

はせがわ・まことさん

ラテンアメリカ青少年の会理事。青年海外協力隊でペルーの技術専門学校の教師アドバイザーとして活動。神奈川県に本社を持つ日本発条(株)で自動車用シート開発部門の仕事のかたわら、横浜いのちの電話スペイン語相談員、青年海外協力隊神奈川県OB会長などを務める。

あーすフェスタかながわ企画委員

毎年5月頃にあーすフェスタ・リリースで開催される多文化共生のイベント。半年ほど前から企画委員がプログラムの準備を行う。企画委員会には、さまざまな国籍や文化を持つボランティアが関わっている。

詳しい情報：<http://www.k-i-a.or.jp/earthfesta/>
TEL：045-210-3748（神奈川県県民部国際課企画班）
045-896-2898（かながわ国際交流財団）

暖かい感情を味わうことができる

三浦遼さん

(あーすフェスタ展示運営ボランティア)

私の最初の「ボランティア」体験は、あーすフェスタの国際理解展示室での活動でした。数十年間、面と向かって接したことの無い小学校低学年の生徒たちと、どう接してよいのか不安でした。最初は、他のボランティアの方がやっているのを見よう見まねでなんとか切り抜けました。

その他に、外国人患者が県内の病院で医療を受ける際の英語の医療通訳や、イベントでの当日ボランティアの活動もしています。

「ボランティア」の醍醐味は、来場者や関係者に喜んでもらえたとき、イベントの準備が時間内に、あるいは夜遅くによろやく終わったとき、すべてが終わって「お疲れ様」といいながら杯をカチンと合わせたときに味わうあの暖かい感情でしょうか。



展示運営ボランティアの仲間と三浦さん(中央)

みうら・はるかさん

中国上海で生まれる。69歳。終戦で引き揚げ、学校生活は神奈川、東京で過ごし、その後埼玉、横浜、三重と移り、大阪で定年を迎える。現在は横浜在住。仕事は海外営業を担当、世界各地を訪問。好きなことは、知らないところへ行く、知らない仕事をやる。酒を飲む。愛犬と過ごす。

あーすフェスタ展示運営ボランティア

5階の常設展示室では、展示運営ボランティアが展示と来館者をつなぐ介在者(ひと)として、来館者に提供するプログラムの企画や実施、運営を支えるための資料準備など、さまざまな活動を担う。

詳しい情報：<http://www.k-i-a.or.jp/plaza/shisetsu/volunteer/>
学習サービス課
E-mail：gakushu@k-i-a.or.jp
TEL：045-896-2899

情報源情報

ボランティア活動をどのように始めたらよいか迷っている方に、ボランティア活動の情報源をご紹介します。

ボランティア・ファーストコンタクト

「どんなボランティアをしたいのか分からない」という方は、まずはこんなところにコンタクトをとってみたいかがでしょう。

かながわ県民活動 サポートセンター 情報・相談コーナー

かながわ県民活動サポートセンターでは、NPOと協働で、ボランティア活動を始めたい方から、具体的なノウハウまで、実際の活動中の経験豊かなアドバイザーが相談に応じています。

月～土：13:00～19:00
日・祝：13:00～17:00

〒221-0835
横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2
かながわ県民センター9階
<http://www.kvsc.pref.kanagawa.jp/>
E-mail :
mail@kvsc.pref.kanagawa.jp
TEL : 045-312-1121
(内) 4112

財団法人 横浜市国際交流協会 (YOKE)

横浜の国際化を推進するために設けられた団体。国際交流・国際協力活動の促進・支援、地域の国際化の促進・支援などの事業を行っています。

E-mail : yoke@yoke.or.jp
TEL : 045-222-1173

おだわら国際交流ラウンジ

おだわら国際交流ラウンジは、外国人と共に生きる住みよい環境づくりを進めるために、外国籍住民への情報提供の場、国際関係団体の活動の場、国際交流の場として、1998年に設置。談話スペースや会議スペースの他、新聞や雑誌などの資料も置いています。

〒250-0011
小田原市栄町1-15-19
栄町駐車場3階
<http://www.city.odawara.kanagawa.jp/field/i-national/i-exchange/lounge.html>
TEL/FAX : 0465-24-7760

さがみはら 国際交流ラウンジ

日本人と外国人市民が同じ市民としてともに生きる平和で豊かな社会をめざして、お互いの文化を尊重し理解し合うために、さまざまな催しや活動を行っています。また外国人市民を支援するために、必要な生活情報を提供し日本語教室や学習教室、相談も行っています。これら、情報・支援・交流の3つを柱とした事業や活動は、すべてボランティアによるものです。

〒229-0033
神奈川県相模原市鹿沼台1-9-15
プロミティふちのべビル2階
<http://www1.odn.ne.jp/sil/>
TEL/FAX : 042-750-4150

こんなボランティアがあります。

「ボランティア」といっても具体的な活動が浮かばないかもしれません。たとえば下のような活動もあります。やってみるとそこから活動が広がっていくかもしれません。

○日本語学習サポーター 多文化まちづくり工房

多文化まちづくり工房は、横浜市泉区から大和市にかかる県営いちょう団地で中国やベトナム、カンボジアなど多様な文化背景をもった人たちがそれぞれの個性を出し合い、ともに楽しく暮らせる「まち」をつくることを目的とした団体。団体では、外国籍の方たちに日本語を教えるボランティアを募集しています。経験や資格は問いません。詳しくは団体へ。

時間：水、土曜日 19:00～20:40
場所：いちょう小学校コミュニティハウス「国際交流室」

<http://tmkobo.web.fc2.com/>
E-mail : kobo_jimu@yahoo.co.jp
TEL : 045-805-4323



○ボランティア登録で情報を NPO法人 横浜NGO連絡会 (YNN)

YNNは、国際協力のイベントなどを通して交流のあった横浜や神奈川県内のNGOが、連携してお互いの能力を高め、より広く国際協力活動を進めようと2001年に設立されました。国際協力のイベントやセミナーの開催をしたり、国内外のボランティアをしたいなどの様々な相談を受けています。

NGOとボランティアのための協働システム「SANVASI」にボランティア登録をするとYNN会員団体・YNN事務局のボランティア募集の情報がもらえます。詳しくは団体へ。

「横浜国際フェスタ2008」開催に向けたボランティアミーティング

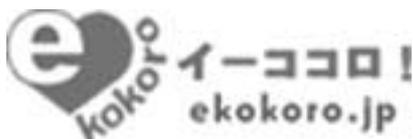
日時：3月22日(土) 13:00～
場所：JICA横浜 1階会議室
対象：2007年に参加した方(初めての方もオブザーバー参加可)

〒231-0001 横浜市中区新港2-3-1
NGO相談員 E-mail : soudan@ynn-ngo.org
ボランティア登録SANVASI E-Mail : sanvasi@ynn-ngo.org
<http://www.ynn-ngo.org>
TEL : 045-662-6350
FAX : 045-663-3263

いろいろなサポートのかたち

「関心はあるけど、ボランティアをする時間がない」「いきなりボランティアに行くのはちょっと…」という方でも、こんな方法はいかがですか。時間が取れなくても、自分のお金を払わなくても、ボタンのクリックで、リサイクルで国際協力に貢献できます。ちょっとしたことでもできることから少しずつ。

○NGO/NPO募金・寄付サイト イーココロ!



クリック募金

バナーをクリックすると企業などのスポンサーが、クリックした人に代わって1回につき1円をNGO/NPOに募金する仕組み。募金先NGO/NPOは子ども支援に携わる団体から環境保全、緊急支援などさまざま。クリック募金の他、無料会員登録をすると「イーココロ!」を通してお買い物をする、購入金額の数%がNGO/NPOに寄付される「ショッピング募金」、資料請求や新聞の購読申込み等をするポイントが貯まりNGO/NPOの支援につながる「アクション募金」などができます。

<http://www.ekokoro.jp/>

○リサイクルショップでアジアの女性たちを支援 NPO法人 WE21ジャパン



リユース・リサイクル

神奈川県域でリサイクル店「WEショップ」で寄付品を募り、ボランティアを中心に衣類や雑貨などさまざまなものを販売しています。2007年7月現在で県内に54店舗あります。私たちの生活を見直し、資源を有効に活用すること、アジア地域の人々の生活向上と自立に寄与することを目的として活動しています。収益金はアジアの人々と連携し、人々が力を高めていくNGOの活動に助成しています。お店でのさまざまなワークやパソコン、ニュースづくりなどボランティアメニューが豊富。いつでも参加を受け付けています。

〒221-0052 横浜市神奈川区栄町1-9 ケンコウビル1F

<http://www.we21japan.org/>

E-mail : info@we21japan.org

TEL : 045-440-0421 FAX : 045-440-0440

あーど ぷらざ NGO情報アーカイブコーナー

かながわ国際交流財団のNGO情報アーカイブセンター事業は、NGOやNPOが発行するニュースレターやチラシをできる限り保存し、アーカイブを構築しています。

あーど ぷらざ 情報フォーラム内にあるNGO情報アーカイブコーナーは、

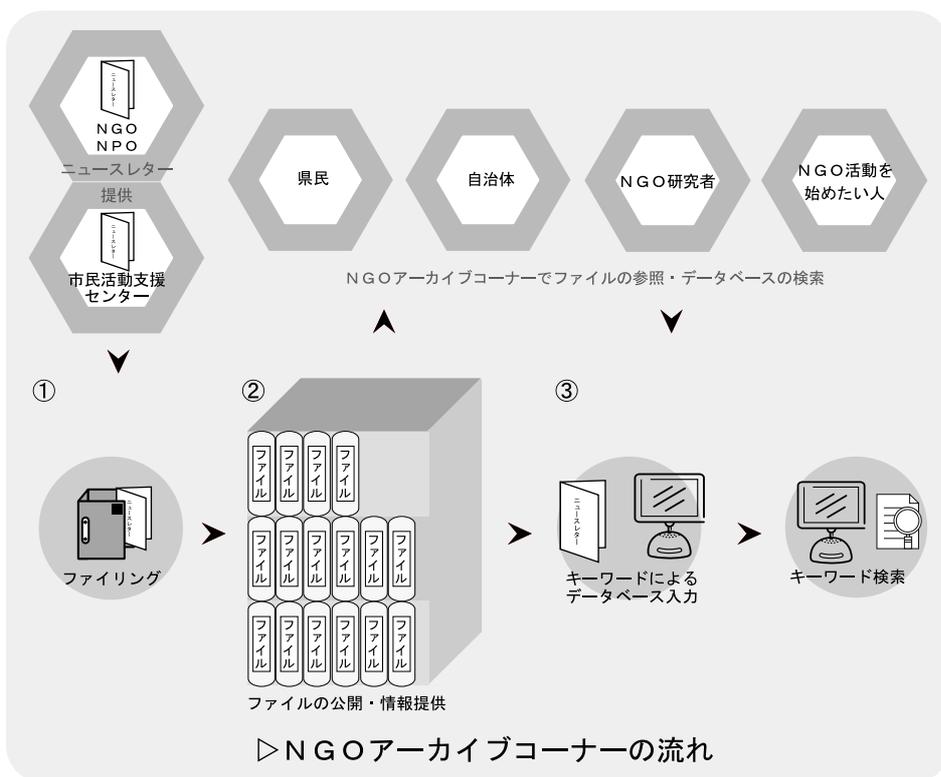
①神奈川県内外で活動するNGO等が発行するニュースレターやチラシの収集・整理・保存

②ファイリングした情報の公開

③データベース化したニュースレターのキーワードによる検索

(2008年3月末運用開始予定)

という3つの役割によって、蓄積した情報を提供し、新たなNGO活動やNGO研究の場として利用していただいています。



知をめぐると対話シリーズ(5)

当財団の学術・文化交流事業に関わってくださった方々とのインタビューを紹介します。



ある美術館をめぐる物語

建畠哲さん(国立国際美術館長)

3月21日から22日、湘南国際村センターで第3回21世紀ミュージアム・サミットの第1部「新たな美術館像を求めて」*1が開催されます。このサミットへはフランス文化遺産局学芸局長ジェルマン・ヴィアット氏、中国美術館長ファン・ディアン氏、スコットランド・ナショナルギャラリー近現代美術館長サイモン・グルーム氏、ニューヨーク・アジア協会理事長ヴィシヤカ・デサイ氏という海外からの著名な美術館長らをはじめ、日本の美術館の最先端を担う館長と有識者15名を招き、総勢20名で円卓を囲み、美術館を取り巻く状況と課題を議論します。今回は、このサミットの第1部を企画され、当日議長をつとめられる建畠哲さんにインタビューをしました。

※1 第2部「ミュージアム・イノベーション～変わるミュージアム」は4月2日大手町・日経ホールにて開催。ルーヴル美術館長による基調講演とパネルディスカッション。第1部、第2部とも参加者募集中～3月7日(金)申込締切。詳細は <http://www.k-i-a.or.jp/museum/> へ!

※2 ステファヌ・マラルメ(Stéphane Mallarmé) 1842-1898年。19世紀フランスの象徴派系譜に入る代表的な詩人。中学教師として英語を教えるかたわら生涯にわたって詩の可能性を探求し続けた。難解な詩を創作することでも有名。

※3 キッチュ(kitsch) 一見、陳腐なもの、俗悪なもの、毒々しいものの中に認められる美的価値。単に陳腐だけではなく、陳腐であるが故に、周囲の注目を集め、独特の存在感を呈するものを意味することが多い。

人生は平穩に、書くことはラディカルに

建畠さんは現在国立国際美術館長をされながら、詩人としての活動も行っているらしいです。大変ご多忙な毎日と思いますが、詩を書くと思うのはどのような時でしょうか。

これは最近の悩みの種です。詩を書く時間は日常的な時間とは違います。ちょっと空いた時間に、さあ詩を書きましょうというわけにはいきません。美術館長になってからというもの実業の世界にいる時間が長くなり、気持ちの切り替えが中々うまくいかないのです。詩人というのは社会の規範の中で生きていない。だからこそ彼らの言葉には迫力があり、時代のモニュメントとなるような作品を生み出す。ボードレールもそうした一人ですね。しかし、僕のモットーは「人生は平穩に、書くことはラディカルに」なんです。僕のもっとも敬愛するマラルメ*2は、そういう意味で、仰ぎみる理想です。最近では唯一の創作活動は移動中の新幹線ですね(笑)。

実業の世界の建畠哲を演じているときは、詩人の建畠哲はどこか片隅においやられているという感じでしょうか。

詩を書くとき、その言葉を日常の言葉からどう隔離するかが大事になります。絵や音楽には独自の表現方法がありますが、「詩だけに使う言葉」というものはありません。「机」は「机」、「電車」は「電車」です。言葉で詩を表現するには日常的な了解事項から切り離し、さらにそこに精神的な緊張感や問題意識がなくてはなりません。短歌や俳句には韻律があり、形式が保証してくれる。でも僕の詩は散文詩なので、日常的な言葉と変わらない。言葉を使って、ある表現をどのように世に返していくかは難しい課題です。

「風呂屋のペンキ絵」のナゾ

日本においても芸術文化に対する期待が高まっています。それは今社会で起きてい

る複雑な問題に対して、文化を理解する心が新たな解決策をもたらしてくれるのではないかと期待がこめられているからだと思います。しかし時と場合によって、芸術の感じ方が全く違うということは、誰もが体験することだと思います。芸術を感じるために必要なものは何でしょう。

これは大問題! 芸術に関しては見る人によって価値判断が違っていいと思う。物理や数学であれば、客観的な基準があって、全ての人が理性でそれを確認する。例えば、アインシュタインの相対性理論。これは理解できないからといって誰もつまらないものとは思わないですね。芸術にもアインシュタインに匹敵する凄いや天才もいますが、芸術の感じ方は多様であっていい。一人の人でも朝聞いてよと思った音楽を夕方聞いてそう感じないことがある。同じ人が同じものをみて違う反応を起こすことに、どちらが本当で、どちらが本当でないかということではないのです。

風呂屋にペンキ絵がありますね。富士山や松がある風呂屋の絵。ある時僕は風呂屋でペンキ絵を眺めながら、「こんな絵ばかり見ているから日本人の感性は育たない」と苛立ちを覚えていたら、そこへ威勢のいいおじさんが入ってきて「絶景だね。こりゃ、いいね」と言うわけです。それを聞いて僕は「日本の美術館は絶望的だ」と思っていたりすると、次に若者が入ってきて、「おっ格好いいね。キッチュ*3じゃないの」と言っているわけです。みんな同じものを見ながら全く別の話をしている。僕としては「もーこれでもいいか!」と思うわけなんですよ。

豚の顔抽象絵画論

美術館は色々な人が訪れるところです。なぜなら公的な美術館はすべての市民に対して還元する義務があるからです。「抽象絵画には好き嫌いがあってもいい」と言いましたが、心のどこかでは分かってほしい



と思っています。もちろん芸術は物理学とは違うけれど、難解と言われるものを理解する方法論が全くないというわけでもない。

その一つは歴史の中にあります。なぜモンドリアン^{※4}はあんな絵を描いたのか。その前提にはセザンヌからピカソらのキュビズムに至る絵画の展開があるのです。展覧会でそうした流れを絵画で見せることができれば一番いい。ある時突然天才が現れて、難解な抽象作品を作ったのではない。そこにはまた都市空間の出現という社会的な背景もありました。美術館はそのような歴史的経緯の説明を地道に行わなくてはなりません。

もう一つは、とにかくたくさん作品を見ること。古美術や骨董品の目利きもそうですよね。たくさん見ることによって目が鍛えられる。これは歴史を知ることよりも重要なことです。コレクターはその点、一番感覚が冴えているといわれますが、身銭を切るというリアリティーのある体験をすることによって鍛えられるのです。

知ることは愛することといいますが、見れば見るほど興味が募ります。よくあのでの抽象絵画はみな同じに見えるといわれます。しかしあのでのものというのは実際には存在しません。個別に違います。以前京都大学で研究会をしていたとき、隣の研究室に動物行動学の助手がいました。その人は北海道のある海岸に生息する約200頭のアザラシを研究する専門家でした。彼はその200頭のアザラシすべてを個体識別ができるというんです。それぞれに名前をつけていて、見たらすぐ分かる。そして、豚の顔だって人間の顔よりよっぽど個性的だということなんです。

これは不思議な話です。僕たちには豚の顔は皆同じに見える。しかし、彼のように興味を持っていくと、個体識別ができるようになり、そうなるとうまう好きになる。最初は抽象絵画がみな同じに見えるかもしれませんが、豚の顔が人間の顔以上に個性的であるように、見る経験を踏まえれば抽象絵画もそれぞれ個性的に見えるようになります。知ることは違いを知ることであります。それにはまず色々見ていくことしかありません。まあ、喩えが悪いと画家たちに文句を言われてしまうかな。

ミュージアム・ピースとは

美術館のもっとも重要な機能の一つに作品の収集があるといわれます。建畠先生にとって優れたものを判断する基準とはなんでしょうか。また、それが他者の判断と相容れないとき、何がよりどころとなるのでしょうか。

美術館活動の両輪に展覧会と収集活動があります。展覧会は一過性のものです。同時代の市民社会に対して還元していくものなので、同時代の反応が返ってきます。それに対し、収集活動は未来の社会に対する責務です。我々が今、東京国立博物館や東

京国立近代美術館に行き、過去の作品を楽しむことができるのは、明治、大正、昭和の美術館の人たちがそういう責務を果たしてくれたからです。ですから我々もまた美術館というものを自分たちの世代だけが享受するだけではなく、子孫に対しても充実した作品を残し、その責務を果たさなくてはならない。税金が付託されているのはそのためでもあるのです。

後世にも残すべき作品を我々は「ミュージアム・ピース (museum piece)」と呼びます。我々も可能な限りそう呼ぶに足る作品を収集したいと思います。収集にあたってはキュレータの独善的な判断や恣意性は防がなくてはいけないと思いますが、だからといって国民投票で決定するわけにもいきません。誰かが専門的な立場から選ばなくてはなりません。しかし多様なキュレータが判断することによって、全体の偏りは軽減されます。

少なくともキュレータには二つの判断基準があると思います。一つはそれがある様式の典型をなす作品であること。キュビズムならキュビズム、ミニマリズム^{※5}ならミニマリズム。その周辺領域ではなく、その典型的な様式を持つ作品です。もう一つはある様式からある様式へ移る端境期にある作品。例えばピカソが初期キュビズムから分析的キュビズムに移り変わる時、彼にとって重要な課題が緊張感を持って作品に現れる。不思議なことに、これら二つの点はある一つの作品において一致することがあります。移行期にその様式の典型が現れるのです。ミュージアム・ピースと呼ばれる作品にはそういう特徴がある。

美術館は無敵ではない

最近美術館の中のレストランやカフェ、ショップが人気です。生活と密着した美術館のあり方が提案されることが増えてきました。

芸術が純粋な鑑賞の対象となったのは近代のことです。近代以前、芸術は宗教権力、国家あるいは政治権力と結びついていました。宮廷音楽と宮殿と肖像画、教会音楽と宗教絵画は、ある一つの価値観の中で芸術が有機的に結びついた結果です。ところがある時期から、学問、宗教、道徳が分離し、芸術も芸術としてのみ鑑賞されるようになった。それは近代の特殊かつ病的な現象ともいえます。

僕は、今なおボードレールを信奉する近代主義者ですが、一方では近代は悲惨な時代であり続けているとも思っています。近代は偉大な芸術をたくさん生み出しましたが、それと同時に人類は非常に効率的に多くの人を殺してきたのです。その後、ポストモダンが現れ、近代のあり方に疑問を呈する声も聞かれるようになりました。ホワイト・キューブ^{※6}における美術の純粋な鑑賞に対しても批判が現れる中で、例えば美術館のレストランに行くついでに絵を見ましようというのは健康的な傾向だと思います。



※4 ピエト・モンドリアン (Piet Mondrian) 1872年-1944年。オランダ出身の画家。カンディンスキーと並び、本格的な抽象絵画を描いた最初期の画家とされる。

※5 ミニマリズム (minimalism) 1960年代のアメリカで主流を占めた美術運動。非遠近法的な空間構成やイリュージョンの排除を特徴とする。代表的作家にC・アンドレ、D・フレイヴィン、S・ルウィット、A・ラインハートらがいる。

※6 ホワイト・キューブ (white cube) 真っ白く、直線に囲まれたニュートラルな展示空間。1929年にニューヨーク近代美術館 (MOMA) が採用して以来、近現代美術を扱う美術館では、鑑賞空間の理想としてきた。



しかし、だからといって、美術館はその延長線上に位置しているわけではありません。パー・ジュニア^{※7}がいった通り、美術館の可能性は無限ではない。美術館は時代の状況に極力柔軟に対応していくべきですが、美術館は美術館なのです。しかし、イノベーション(革新)していくことは美術館の範疇の中で十分可能なことです。ギャラリー^{※8}という聖域を守りながら、実験を行うことには意味があると思います。

国立国際美術館では「8割は王道を行き、2割で実験をする」と言っています。8割は聖域です。そして2割の部分では何でもありにしている。柔軟に運営することに対して方針を立てない。分からないことは結局分からないのです。その中には間違っていることもあるし、意外にうまくいくこともある。これを10年、20年続けているうちに、その2割が確実に大きくなっていくと思う。僕は抜本的、根源的に新しい体制を作ることは最も早く古くなる方法だと思う。それまでにない新しいものは、出来たときにピークになってしまふ。そのときに考えられる新しいもの全てを投入するとあとはいま古くなるしかない。結局新しくあり続けるためには常にイノベーションをやり続けるしかないと思うのです。

1割の不断のイノベーション

イノベーションをやり続けるしかないと思ったのは、コロンビア大学東アジア研究所に1年間滞在したときのことでした。ある日僕が研究室に行くと、メールで「あなたの属している研究所の名称が変わりました」と通知が来ました。見るとスポンサー企業の名前が冠についている。以前に言語科学部が廃止されたように、ここではいつも組織をいじっていて、落ち着きのない大学だと思っていたら、自分のところの名称も変わってしまった。しかし、聞いてみたら一度に変えるのは1割にしているという話なのです。大規模な学部の再編成や根源的に新しいことは滅多に行わない。その代わり常にどこか変化させている。常に新しくあり続ける一番柔軟な方法ということなのでしょう。

美術館～緩慢なる市民革命の場

日本政府は文化力が重要といいつつも、財政的には緊縮傾向にあり、税金の使途としても重要性があると積極的に判断されていない状況にあります。現代の社会に対し、美術館がもっとも貢献できるものは何であると思われますか。

美術館は近代の市民社会にレーズン・デートル^{※9}を置いています。ところが日本は市民革命を経験していない。明治維新で近代性を確立し、産業社会を生み出しましたが、権利意識を持った近代市民はここでは生まれなかった。第2次世界大戦後の民主主義というのは与えられた民主主義で市民の手で勝ち取ったものではなかった。近代市民という観点からは日本は中途半端な状況におかれたままです。しかし、

美術館にとっては権利意識を持った近代市民は不可欠です。ですから、美術館は「緩慢なる市民革命の場」と思っています。人々に権利意識を持ってもらい、美術館が人々の税金によって支えられていること、そしてそれを享受する権利を持っていることを意識してほしい。

社会の多様性を保つために

それでもなぜ世の中に美術館が必要なのかという問題がある。美術を鑑賞する機会を与え、日常生活を豊かにし、充実させ、未来の人に文化遺産を継承する。これらが美術館の第一義的な役割です。しかし、社会保険、老人福祉、医療、教育など美術館以上に喫緊の課題は日本にたくさんあります。そのような状況の中で難解と言われる現代美術を広めようとするのは何のためかといえば、多様性のある社会を実現したいからです。

日本は均質な単一言語の単一民族社会に近い。多様性のない社会は一見非常に効率のよい社会であり、産業も振興しますが、ある瞬間に一気に狂気に陥る可能性があるからなのです。多様性のある社会とは何か。外国人、身障者、精神障害者、老人、子ども、女性が差別されることなく共存する社会のことです。効率は悪くなるかもしれないですが、こういう社会が健全なのです。

その中にはアーティストもいます。感受性の強いアーティストは我々に楽しいもの、豊かなものを提示してくれると同時に、我々の社会に対して批判的な役割を果たしている。そういう人たちが一定の割合で共存するために、美術館は必要だと思うのです。社会の安全を確保するために必要なのは警察や自衛隊だけではありません。我々の社会が危険な傾向に向かうときに、美術館があるということは間接的ですが抑止力になるということです。

第3回目のミュージアム・サミットでは、変化を続ける社会の中で美術館の役割が何であるのかを改めて考えるよいチャンスになるのではないかと思います。



プロフィール

建畠 哲(たてはた あきら)

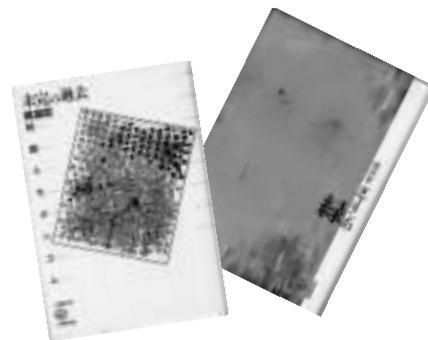
国立国際美術館長。国立国際美術館主任研究官、多摩美術大学教授を経て、2005年より現職。専門は近現代美術。1990、1993年のベネチア・ビエンナーレ日本コミッショナー、2001年の横浜トリエンナーレ・アーティストティック・ディレクターなどを務める。2002-2003年コロンビア大学客員研究員。詩人としても活躍し、1991年に『余白のランナー』で歷程新鋭賞、2005年に『零度の犬』で高見順賞を受賞。その他の著書に美術評論集『問いなき回答』『未完の過去』『ダブリンの緑』など。

国立国際美術館 <http://www.nmao.go.jp/>

※7 アルフレッド・パー・ジュニア (Alfred H. Barr, Jr.) 1902-1981年。MOMAの初代館長。

※8 ギャラリー (gallery) 美術品の展示場。

※9 レーズン・デートル (raison d'être) 存在理由。存在価値。



▶インタビューを終えて

初めて建畠先生にお目にかかったのは、2004年3月の第1回「21世紀ミュージアム・サミット」のとき。核心をつくコメントをさらりと提起する先鋭な評論家というイメージがあり、スリルと期待を胸にかつてないほどの緊張感をもって臨んだ今回のインタビュー。ところが次から次に語られるのは、抱腹絶倒の逸話の数々。少しうつむき加減に語るその穏やかな姿と、深い思索に支えられた柔らかな感触の言葉に、とても温かな気持ちになりました。気がつけば、春もすぐそこです。1月25日収録。

(インタビューア:原嶋千榛)





かながわのキーパーソン

横浜の国際協力団体NGOのネットワークを構築

横川芳江さん NPO法人横浜NGO連絡会事務局長



よこかわ・よしえ

NPO法人日本国際ボランティアセンター理事、NPO法人地球の木の理事長を経て、現職。現在はNPO法人国際協力NGOセンター理事、カンボジア市民フォーラム共同代表なども務める。

学生時代は登山をしており、その頃から環境問題に関心が高かった。子どもが生まれてから食の問題や生活環境に関心を持つようになり、「生活クラブ生協神奈川」に入った。NPO法人「地球の木」に関わり始めたのもこの頃だった。1992年内戦後のカンボジアに

点をつなぐことで社会を変えていく力に

市民調査団として入り、市民の視点から人々の生活に何が必要なのかを調べ、その調査をもとにカンボジアへの支援を開始した。それが横川さんにとって直接海外に出て国際協力に関わった初めての経験だった。

カンボジアでの活動などを通して、「1団体ではできることが限られるが、集まって協力することでできることがあるんだ」と思い、ネットワーク形成に関心を持つようになったという。

イベントやセミナーで顔の見える関係にあったNGOが協力して国際協力を進めようと、横浜NGO連絡会（YNN）を立ち上げた。横川さんもその立ち上げに関わり、現在も事務局を務めている。YNNはネットワークを進め、NGOの能力強化、広報などを行っている。4月には全国からネットワーク型のNGOが集まり、その役割について話し合う会議を横浜で開催する。また外務省から委託を受け「NGO相談員」として、様々な相談に対応している。

YNNは海外で国際協力活動をする現場はないが、その国際協力活動を支えるための裏方の役割を担っている。横川さんは、「海外でプロジェクトを直接実施するだけではなく、より広い視点から世界を見て、その社会の仕組みを変えていくことが必要。すぐに成果が目に見えて実感できるわけではなく、時間がかかることだが、やっていかなければと思います」という。

YNNでは、「横浜国際フェスタ」などの経験から、ボランティア活動を希望する人とNGOの間をつなぐ「SANVASI」というシステムを作った。また、今後はNGOの課題である「資金」「人材」を解決するため、企業からの寄付や税金の受け皿となってNGOに資金を配分する仕組みや人材を育てるなどを考えている。

「それぞれ社会でいろいろな活動している人たちがつながることで、社会を変えていく力になれば」。

春期英会話講座

(財)かながわ国際交流財団では、アメリカ・メリーランド州から招聘した講師を中心に英会話講座を開講します。経験豊かな講師の指導のもと、ディスカッションやペアワークなどのいろいろな学習活動を通して、異文化コミュニケーション能力を身につけ、文化や考え方の多様性について英会話を通して楽しく学びます。



「テーマで学ぶ初級英会話」

受講生募集

詳細はイベントすけじゅーるへ

	火		水		木		金		土	日
	研修室A	研修室B	研修室A	研修室B	研修室A	研修室B	研修室A	研修室B	研修室B	研修室B
10:30 ↓ 12:00	火1の基礎 下村	火1の 残席 わずか リビニ		水1の 中級 ジュエル	木1の 中級 ルトガー	木1の 上級SP リビニ	金1の 初級 リビニ		土1の 満席 リビニ	振替 クラス 渋谷
13:30 ↓ 15:00		火2の 中級SP リビニ		水2の 初級 ジュエル	木2の 中級 ルトガー	木2の 上級 リビニ	金2の 初級 アイラ		土2の 上級 リビニ	
15:30 ↓ 17:00				水3の 初級 ジュエル					土3の 中級 リビニ	
18:30 ↓ 20:00		火4の 残席 わずか ベス	水4の 中級 ジュエル	水4の 残席 わずか ベス	木4の 初級 ルトガー	木4の 上級SP ウェスリー	金4の 初級 キース			

取替：中級・初級
日一

期 間：2008年4月～2008年9月（各クラス原則として週1回全18回）

講 師：リビニ、ルトガー、ジュエル、ベス、ウェスリー、アイラ、キース、下村、渋谷

振替制：欠席した授業を3回まで振替可能（振替クラスは日曜全14回開催）

定 員：通常クラス：12名、セミプライベート(SP)クラス：6名、プライベートクラス：3名

(対象：16歳以上)

会 場：あーび 35c (地球市民かながわプラザ) 1階 研修室A、B

(JR根岸線「本郷台」駅左手すぐ)

費 用：

	非財団会員(税込)	財団会員料金(税込)
通常クラス (基礎、初・中・上級)	42,900円(一般) 41,400円(学生)	39,900円
セミプライベート (SP)クラス	62,850円(一般) 61,350円(学生)	59,850円
プライベートクラス (特A)	82,800円(一般) 81,300円(学生)	79,800円

- 左記の他、教材費(3,000円程度)が必要な場合があります。
- 申し込み時の同時入会(年会費3,000円)も可能です。その場合、会員料金が適用されます。
- 申込み人数が最少開催人数に達しないときはそのクラスがキャンセルになることがあります。その際は全額返金します。

◇お申込み方法：電話、Fax、E-mail、ご来館のいずれかでお問合せください。①お名前、②お電話番号、③ご希望のクラスをお伝えください。その後、希望のクラスの空席状況を確認してから、レベルチェックのご希望の日時をご相談させていただきます。

◇お支払い方法：お申込み後1週間以内に財団窓口か、振込みでお支払いください。費用が5万円をこえるクラスは契約成立後、8日間以内はクーリングオフが適用され、8日間を過ぎても中途解約ができます。

◇お申込み/お問合せ：国際協力課(ふじわけ、森田)

Tel：045-896-2964 Fax：045-896-2945 E-mail：minsai@k-i-a.or.jp(件名「英会話講座」)

KIF Report

財団が行う様々な事業を報告します

1月12日 あ-α 35㉮、19日 横浜市鶴見区

多文化かながわ スタディツアー

「外国につながる子どもたちの学びを支える」をテーマに、子どもたちを取り巻く状況や課題を知り、支援の取り組みの場を訪問するスタディツアーを行いました。1月12日の事前学習会では、外国につながりを持つ子ども達が置かれている状況や県内での取り組みについて、多文化共生教育ネットワークの高橋清樹さんにワークショップを交えてお話をいただきました。1月19日のフィールドワークでは、日系ブラジル人3世の仲松リカドさんによるご自身の経験を通したお話、外国につながる生徒が多く通う潮田中学校での、踊りや音楽など自分たちのルーツの文化を表現している部活動の見学と国際教室の先生による学校現場のお話、大学生による学習補習教室の訪問などを通して、活動紹介にとどまらない生の声を聴くことができました。参加者からは「外国につながるのある子どもの現状や思いを肌で感じることができた」「自分の地域や環境で活かしたい」といった声が寄せられ、自分たちにできることを考え、次の一歩につながる機会になりました。



1月29、30日 湘南国際村センター

湘南国際村フォーラム 持続可能な社会へ向けて ～生命をめぐる対話～

「持続可能な社会へ向けて」を5か年のトータルテーマとして、さまざまな切り口から私たちが目指すべき持続可能な社会について考えるフォーラムです。株式会社湘南国際村協会と共催のもと、湘南国際村にある、総合研究大学院大学、地球環境戦略研究機関、神奈川県立保健福祉大学の協力も得ながら、さまざまな分野の研究者が集いました。第1回目にあたる今回は「生命をめぐる対話」として、モデレーターに県立保健福祉大学の山崎美貴子学長、基調講演の講師には総合研究大学院大学の長谷川真理子教授を迎えて開催しました。その他の講師・討議者についても、言語学、社会福祉、栄養学、宗教学、アート、心理学、環境政策、理論生物学、先史人類学といったバックグラウンドを持った多様な方が集い、2日間に渡りディスカッションを繰り広げました。



2月9日 湘南国際村センター

湘南国際村アカデミア 豊かな人生を考える： 地域と「食」

講演と試食、コンサートなどを組み合わせ、豊かな人生を考える、湘南国際村アカデミアの新シリーズを開催しました。まず「豊かな人生のための栄養学」をテーマとした講演会では、神奈川県立保健福祉大学の中村丁次教授を講師に迎え、栄養学の観点から見た食と人生の豊かさの関係についてお話いただきました。つづく料理紹介と試食のプログラムでは、地元三浦半島の食材を使った鍋料理「ミウラジアン鍋」を考案した、佐々木弘美さん（辻クッキング講師）による料理の実演後に、参加者にも試食していただきました。最後のプログラムとして三浦半島各地で演奏活動をしているフォックスティルグラス（ピアノ&パーカッション）によるミニコンサートを楽しみました。このような多彩なプログラムを通して「豊かな時間」を過ごし、今回のテーマとなっている「豊かな人生を考える」きっかけとなる場を設けました。



2月1日～11日

あ-α 35㉮ 開館 10周年記念イベント

2月1日(金)から11日(月)の11日間、あ-α 35㉮ 開館10周年記念イベントを開催しました。

日頃の感謝の意味をこめ、5階の常設展示室を無料で開放する他、親子で楽しく世界の文化にふれるイベントや、環境や国際理解をテーマとしたセミナーを開催いたしました。来場者の方からは、「イベントに参加したことで、あ-α 35㉮ がよくわかり良かった。世界の様々な生活の様子を見て、さわって、理解が出来る勉強になる」「戦争のことや、地球温暖化のことをたくさん学ぶことができました」などの声をお寄せいただきました。11日間の開催で、2,918名の方にお越しいただきました。



Event Schedule

このほかのイベントの情報をご希望の方はメールマガジンをご購読ください。 <http://www.k-i-a.or.jp/mail-maga/>

イベント すけじゅーる

受講生
募集中

3月16日(日)

「外国につながる子ども」のサポートを考えるフォーラム ～高校進学・入学後をどう支えるか

日本の小中学校に在籍する「外国につながる子ども」の数は増えていますが、彼らに対する日本語や学習面、精神面でのサポートは十分であるとはいえません。また、高校入試を突破するのは難しく、高校進学後も様々な理由で退学してしまう生徒も後を絶ちません。多文化共生教育ネットワークかながわ(ME-net)と(財)かながわ国際交流財団(KIF)では2007年度から県教委と教育問題に関わるNGOが集う会議を開催し、「外国につながる子ども」を支える方法について検討してきました。今回のフォーラムでは、この会議の経過報告と、大阪での取組み、そして県内4つの高校で始められた「教育コーディネーター」制度や県立高校を卒業した若者の声を紹介します。

【第1部】「外国につながる子どもを持つ子ども支援のためのネットワーク会議から」
高橋 徹(多文化共生教育ネットワークかながわ)

【第2部】「大阪における高校進学・卒業支援の取組みについて」
小川 裕之(府教委市町村教育室児童生徒支援課)

【第3部】分科会

- ・全日制高校での教育コーディネーターの活用
進行：島本篤エルネスト氏(多文化共生教育ネットワークかながわ)
発表：新井敦子氏(神奈川県立有馬高校教諭)
秋間恵美子氏(有馬高校教育サポーター)
- ・定時制高校での教育コーディネーターの活用
進行：高橋清樹氏(多文化共生教育ネットワークかながわ)
発表：伊勢敏明氏(神奈川県立横浜翠嵐高校定時制教諭)
山縣紀子氏(横浜翠嵐高校教育コーディネーター)
- ・高校での進路選択のサポートについて
進行：山田泉氏(法政大学キャリアデザイン学部教授)
発表：瀬底ハメラ成子氏(ブラジル出身、大学4年)

【第4部】まとめ

- 日時：2008年3月16日(日) 13:30～17:00
- 場所：あーす 1階会議室 ■定員：80名
- 申込み：下記まで「お名前」「ご所属」「電話番号」「希望の分科会」をお知らせください。
- 問合せ：国際協力課(担当：富本) TEL：045-896-2964
FAX：045-896-2945 E-mail：tomimoto@k-i-a.or.jp

3月16日(日)

ワールドカルチャーデイ スペシャル

今月のワールドカルチャーデイは、1年に1回のお楽しみスペシャル。6人の異なる地域出身のゲストによるお話やクイズ(おしゃべりワールド)、チャンゴ(韓国・朝鮮の楽器)のワークショップなど、子どもから大人まで一緒に楽しめるプログラムが満載。プラザで世界を巡って、新しい発見をしてみよう!

- 日時：3月16日(日)
- 場所：あーす 5階 こどもの国際理解展示室など
- (1)民族楽器のワークショップ 13:00～14:30
- (2)おしゃべりワールド 15:00～16:30
- (3)あーすシアター上映会
・「世界の秘境 The World Unexplored Region」 10:30～11:50
・「アレクセイと泉 百年の泉の物語 ALEXEI AND THE SPRING」 14:00～16:00
- (4)カナガワピエンナーレ国際児童画展選外作品展【3月中常時開催】
- (5)地域展示・交流コーナー【3月中常時開催】
- 参加費：無料(要常設展示室観覧料500円)
- 問合せ：学習サービス課(担当：前田)
TEL：045-896-2899(祝日除く月曜休み) FAX：045-896-2299
E-mail：gakushu@k-i-a.or.jp

4月22日(火)～7月8日(火)

テーマで学ぶ春の初級英会話

講師の母語の文化を題材に、習慣や考え方の多様性について「英会話」を通して楽しく学ぶ講座です。毎回テーマを決めて英会話を楽しみます。とても丁寧に教えますので、英会話にあまり慣れていない方でもリラックスして参加できます。英語のおしゃべりを楽しみたい方はこの機会にぜひご参加ください。

■講師：Jonathan Lynch(ジョナサン・リンチ)
麻布大学英語専任講師

■日時：4/22、5/13、5/20、5/27、
6/3、6/10、6/17、6/24、7/1、7/8
18:30～20:00

■場所：神奈川国際学生会館・淵野辺
1階・研修室
神奈川県相模原市鹿沼台1-10-22
(JR横浜線「淵野辺」駅南口より徒歩3分)

■定員：10名(最小実施人数5名)

■対象：初級者(英語で簡単な文を話せる方)

■料金：受講料 21,000円(税込み)

○財団会費 3,000円(一般会員)

または1,500円(学生会員)
(会費は非会員の方、もしくは会員の方でも有効期限が講座開催全期間を満たさない方のみお支払いください。)

■問合せ：国際協力課(担当：ふじわけ)

TEL：045-896-2964 FAX：045-896-2945

E-mail：minsai@k-i-a.or.jp

5月17日(土)、18日(日)

あーすフェスタかながわ2008 ～みんなで育てる多文化共生

世界の料理、ステージパフォーマンス、ダンスや民族音楽のワークショップ、バザールでの民芸品販売、フォーラムなどをとおして、「多文化共生」について考えるイベントです。異なる国籍、文化、歴史的背景を持つ人たちが、集い、出会い、語り合うあーすフェスタにみなさんぜひお越しください。なお、事務局では当日の運営を手伝ってくださるボランティアを募集しています。詳しくは事務局にお問い合わせください。

★最新情報はホームページへ

⇒ <http://www.k-i-a.or.jp/earthfesta/>

■日時：5月17日(土)、18日(日)

■場所：あーす 及びリリス
(横浜市栄区民文化センター)

■参加費：無料(一部有料)

■問合せ：

あーすフェスタかながわ2007実行委員会事務局
神奈川県民部国際課企画班(担当：若松)

(財)かながわ国際交流財団(担当：菅沼)

TEL：045-210-3748(企画班、土日休み)

TEL：045-896-2899(財団、月曜休み)

E-mail：festa@k-i-a.or.jp

● **かながわ国際交流財団は・・・**

地球のすべての人が、国境や人種、文化の違いを越えて、人間らしく暮らせる社会の実現のため、人と人のつながりを大切にした国際交流・国際協力、地球市民意識の高揚と多文化共生社会の実現、国際的な人材の育成、学術・文化交流並びに情報発信などの様々な事業を展開しています。

● **会員になりませんか？**

財団の活動を支える会員を募集しています。

会員になると・・・

- ・財団が主催する各種催しを掲載した情報紙をお送りします。
 - ・当財団の出版物の割引サービスが受けられます。
 - ・会員の方を対象にした催しへご招待します。
 - ・会員証の提示で、提携エスニック・レストランの優待サービスが受けられます。 など
- *会員登録をご希望の方は、財団までお問い合わせ下さい。振り込み用紙など関係資料をお送りします。

★当財団は、2006年4月より、神奈川県から指定管理者の指定を受け、**あーぢ 355**を運営しています。

★このほか、神奈川県国際研修センターと神奈川県国際学生会館を運営しています。



JR根岸線「本郷台」駅改札出て左すぐ



湘南国際村学術研究センター

読者のみなさまからの投稿を募集しています。

原稿(800字程度)をFAXかメールで情報紙編集係までお送りください。紙面の都合で編集する場合、掲載できないこともあります。予めご了承ください。

かながわ国際交流財団ニュースレター 2008年3月1日発行 第6号

発行/財団法人かながわ国際交流財団(本部)
〒247-0007
横浜市栄区小菅ケ谷1-2-1 **あーぢ 355** 1F
TEL:045-896-2626 FAX:045-896-2945
URL:<http://www.k-i-a.or.jp>
E-mail:minsai@k-i-a.or.jp
印刷/文明堂印刷株式会社

バスでお越しの場合

JR横須賀線「逗子」駅前1番乗り場より、16または26系統「湘南国際村」行きバスに乗車、「湘南国際村センター前」下車。所要時間約25分 料金340円

広告を掲載しませんか？

各ページに広告を掲載するスペースを設けています。県内で国際協力・国際交流の活動を展開している市民活動グループをはじめ、図書館、公民館、パスポートセンター、県立高校、市町村国際担当部署、市町村教育委員会、市町村区役所、県庁、会員などに配布しています。発行部数は6,000部です。どうぞお気軽にお問い合わせください。

編集後記

人と人の間に生きると書いて「人間」。人はたくさんの人との関わり合いの中で生かされていると言われる。でも関わり合いの中で傷つくこともある。ときには、傷つくことを恐れて「独り」になる。でも自ら「独り」になることと、「独り」になることを選んでしまう環境に置かれることとは、それぞれに心の中に違う傷を抱えることになる。時間とともに傷は癒えるというが、癒えない傷は時間とともに深くなっていく。人との関係で抱えた傷は人との関係の中で、癒していくことができると思う。(も)

【広告】



撮影:モザンビーク派遣 エイズ対策隊員 斉藤 暁

青年海外協力隊・シニア海外ボランティア

応募期間：平成20年4月8日～5月23日

神奈川県説明会日程は JICA 横浜 HP より

<http://jica.go.jp/yokohama/index.html>

日本は世界に何ができるだろう
あなたはこの子供に何ができるだろう

